

『独逸文學』50号に思う（渡辺有而教授古希・退職 記念 50周年記念号）

その他のタイトル	Gedanken zum 50. Heft der "Deutschen Literatur"
著者	八亀 徳也
雑誌名	独逸文學
巻	50
ページ	11-15
発行年	2006-03-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/12890

『独逸文学』50号に思う

八 亀 徳 也

今、私の手元に『独逸文学』創刊号がある。奥付によると、昭和33年(=1958年)5月発行、編集兼発行者が関西大学独逸文学会(吹田市千里山)、印刷所は寿印刷株式会社(大阪市西淀川柄里町3の129)となっており、ページ数は102、執筆者はW. リルツ、義則孝夫、脇阪豊、小川悟、和田賀一郎の5氏で(この内、3人の方はすでに故人となっておられる)、論文の内訳は、ドイツ語教授法に関するものが1篇(独文)、文学論文が3篇、翻訳が1篇である。1949年(昭和24年)に本学文学部に独逸文学科が創設されてから9年、ようやく学会誌が産声を上げた訳である。そしてこの度、我々の『独逸文学』は50号という記念すべき地点にまで達したのである。まことに喜ばしく、また誇らしい実績であり、歴史である。

今回この第50号が発行されるにあたり、我が『独逸文学』の歩みを回顧する一文を執筆するよう求められて一私自身、必ずしもその適任者ではないが一1号から49号まで一通り目を通し、とくに編集後記は全て読んだので、その中から浮かび上がった事実や思い出の幾つかを以下において綴ってみたいと思う。

2

上記創刊号の編集後記を、当時学科の主任をしておられた上道直夫教授は、「[前略]しかしとにかくもわれわれの矜持と喜びとをもって第一号は生まれた。今後は年二回の発行を持続する決意である。この機関誌の質、量による発展はひたすらわれわれ全会員の強靱な学問意欲と協力に依存するのみである」という、非常に力強い意気込みと覚悟の言葉で締めくくっておられる。昭和30年代の初めと言え、まだ戦後の混乱と貧しさが少しは残っていた頃であるが、教養外国語としてのドイツ語と人生の何らかの指針としてのドイツ文学に対する日本人の崇敬と期待はな

お大きかった(例えば、戦後 10 年間のドイツ文学作品の翻訳の多さを想起せよ。あのような時代はもはや二度と来るまい)。それだけに学界と個々のゲルマニストの使命感も強かったに相違ない。

『独逸文學』第 2 号は予定通り同じ年、1958 年の 12 月 20 日に発行されたものの、年 2 回発行の体制は 1960 年(昭和 35 年)の第 6 号で終わる。毎号平均して 3 篇の論文が掲載されていたが、この方式を維持するにはやはり無理があったのであろう。これ以降、原則として年 1 回発行という形が取られて現在に至る。ただし、これが崩れたことが過去に 2 度あった。1 回目は、第 12 号が出るべきであった 1966 年(昭和 41 年)である。もっとも翌年の 67 年に、『内山貞三郎教授古稀記念号』(文学特集)と『内藤好文教授古稀記念号』(語学特集)が 12 号の 2 分冊の体裁で発行されているから、もともと両教授の同時退職が予め分かっていたことによる措置であったのだろう。2 回目の休刊は 1975 年(昭和 50 年)であった。理由は、統一教科書制度が一部自由化され、それまで印税収入に大きく依存していた学会の財政が逼迫したことである。そのために、その 2 年前の 1973 年の第 18 号では、「今後は従来のような年一度の発行は困難かと[...]例えば隔年刊行も一案かと[...]」と予告されている。が幸い、学会費の増額が認められるなどして財政も幾分か立ち直り、第 20 号は翌年の 1976 年(昭和 51 年)に発行でき、従前の慣例に戻ることが可能になった。なおこの号の編集後記には、「当関西大学独逸文学会の『独逸文學』も本号を以て 20 号を数え、人で申せば本誌も漸くここに成年に達したことになりました」との述懐の言葉も見られる。

『独逸文學』を 1 号から 49 号まで概観すると、質・量の変化は明らかである。何よりもページ数の増大が著しく、古くは通常 100 ページ前後で、時には 50 ページを下回ることもあったのに対し、第 16 号(1971 年、上道直夫教授退職記念号)で 448 ページを記録して以来、3、400 ページの厚さは珍しくなくなってきた。また内容も、かつてはもっぱら語学か文学、あるいはせいぜい文学論や文芸学の論文に限定されていたが、ここ 10 年位は、時代の流れを反映して、いわゆるドイツ文化学やドイツ事情に関する論文も目立ちつつある。加えて編集方針も様変わりし、最近数年では、従来の研究論文や翻訳にとどまらず、講演原稿、シンポジウム報告、マルジナリア、エッセイ等をも採用している。さらには、

第30号(1986年)からは、それ以前からの修士論文と卒業論文の題目のみならず、修論の要約も載せるようになるなど、バラエティーに富んだ中身になっている。

『独逸文學』の編集史上、特筆すべきことがある。それは、1964年(昭和39年)3月に退職され、67年に逝去された高尾国男教授の膨大な遺稿の中からヘルダリンに関する原稿を選び、これを第13号(1968年)から第21号(1977年)まで、「フリードリヒ・ヘルダーリン」のタイトルで縦書きの論文として、分割して継続掲載したことである。この論文は1978年(昭和53年)、独逸文學會から単行本『フリードリヒ・ヘルダーリン』として出版され、霊前に捧げられた。編集委員の長年の苦勞が偲ばれる。今ひとつは、第37(1993年)、38(94年)、40(96年)、42号(98年)において、<ゲルマン語の歴史>(1~4)の特集が組まれたことである。これも前者に劣らず計画性の高い、息の長い企画であったと言えよう。また、第42号(1998年)から今回の第50号(2006年)に至るまでの計9号の内、古稀・退職記念号が実に7号に上る(とりわけ最近は4年連続)ことも特記事項に加えられるであろう。蓋し時の流れと申すべきか。

3

『独逸文學』編集・発行の主体である関西大学独逸文學會が発足したのが1957年(昭和32年)で、この年の6月に制定された会則は学会誌の第3号(1959年)に初めて掲載されるのであるが、そもそも学会の活動は、当初はもっぱら研究発表会の開催と機関誌の発行であった。『独逸文學』創刊号には、1957年度(昭和32年度)の行事として、6月2日の総会並びに第6回研究発表会と12月17日の第7回研究発表会が報告されている。1年に2回の発表会があったと仮定すると、第1回目は少なくとも1954年(昭和29年)まで遡ることができる。

学会活動が俄かに活況を呈するのは、筆者の記憶では、独文科とズィーゲン大学との交流が始まった1982年(昭和57年)頃からである。その交流は、昔我々のOBたちがシュトゥットガルト大学のFr. マルティーニの許で学ばれた時期に助手をされ、当時前記大学の教授であったH. クロイツァー氏との絆が生んだ成果であり、氏に続いて同大学からK. リー

ハ、K.フォンドゥング、K.-L. プファイファーの各教授が来学された。それ以外にも我々は、袁志英教授（中国・復旦大学）、R. デール教授（シュトゥットガルト大学）、また近年ではH.-W. エロームス教授（パッサウ大学）らを招聘研究者として呼んだが、ともかく学会活動の積極化はズィーゲン大学との親交なしには考えられない。それ以来我々の学会は、研究発表会と雑誌の発行のほか、研究会、シンポジウム、コロキウム、講演会、映画会など旺盛な活動を展開している。

4

以上のような多彩な学会活動を支えてきたのは、言うまでもなく独文科教員をはじめとする学内外の学会員であり、その母体は独文教室である。

独逸文学科は、冒頭で述べたように 1949 年に創設されたが、1998 年（平成 10 年）から 2004 年（平成 16 年）3 月まで“ドイツ語ドイツ文学科”を名乗ったあと、文学部の大規模な改組により、同年 4 月から[文学部総合人文学科]“ドイツ語ドイツ文学専修”（以下、独文専修）という名前に変更された。学科の最盛期には 18 名を数えたスタッフも、2000 年（平成 12 年）の外国語教育研究機構の設置に伴って先ず 4 名を失い、本年 4 月の文化共生学専修の立ち上げで 2 名が出、その上過去数年間、退職による空きポストを補充することが認められず、2006 年 4 月現在、7 名にまで減少している。にも拘らず学会活動は従前通り活発であり、独文専修の学生に対しても常に興味深い充実した授業を提供している。

57 年間、半世紀以上に亘る独文学科（独文専修）の歴史の中で、残念ながら不幸なことも何度かあった。筆者が独文科に就職した 1970 年代始めには、あの頃日本全国を風靡した大学紛争の後遺症がなおも残っており、学科にはまだ癒し難い空気が漂っていた。思想的、人間的対立で傷ついたそれぞれが胸の内にそれぞれのルサンチマンを抱いていた。とは言え、当時はみな大人として振舞い、それを公の場で表に出すことは滅多になかった。外国語機構が出来て 4 人の仲間と袂を分かつたを得なくなったときは、まさに生木を裂かれるような思いをしたものだった。その後、独文専修と機構のドイツ語教室との間には常時友好関係が続いている。これら以外に、人間が陥りやすいヒュブリスに起因する所業も

なかった訳ではない。

5

あれが始まったのは一体いつであろうか。日本の大学における外国語、とくに第二外国語の教育を、あろうことか大学人自身の手によってないがしろにすることが。おそらく1991年(平成3年)に大学設置基準の大綱化が導入されるに及び、専門教育を重視すると称して、それまで辛うじて息づいていた外国語並びに教養教育を根底から覆してしまったのだ。そして今や、各大学は、政府の規制緩和政策に呼応して、“官民学”あるいは“産官学”(いずれにしても学は一番後回しだ)なるコラボレーションと“社会との連携”という新しい分野とを目指して奔走している。大学で尊重さるべきは社会のニーズ、学生のニーズだ、とのことだ。単に少子化対策のためだけではなかろうが、果たしてこれで大学の教育・研究の水準が遠い将来まで維持できるだろうか。私は問う、欧米の国々に今の日本におけるような大学があるのだろうか。また、こんなことをして、真の国際競争力を育てられるのだろうか。私は懸念する、いつかこのブームが去ったとき、我々が営々と築いてきた教育・研究の土台はまだ存在しているだろうか。

かつて大学紛争は燎原の火のように日本の大学を席捲した。そして今、わが国の大学は別の所から発した力に圧倒され、呻吟している。このような状況に現在まさに独文専修もドイツ語教室も直面している。自ずと我々の『独逸文學』もその影響と無縁ではあり得ない。この厳しい時代状況の下で学会誌が寿ぐべき第50号を刊行した今、改めて先達たちの努力と苦勞を想い、我々が育ててきた『独逸文學』をさらに発展させるべく決意を新たにしたい。